



# せせらぎ

卒業式特集

令和7年3月26日

清瀬市立清瀬第四小学校



希望を胸に春休み 「学び直し」をじっくりと

校長 長沼 正城

一昨日の修了式、一人一人思い思いに、春休みに入りました。修了式では、6年生が在校生に向けて、有終の美を飾りました。詩の群読を披露してくれたのです。2編の詩。どちらも心に沁みる内容です。

『生きる』(谷川俊太郎)。何気ない日常生活、身の回りのたくさんの素晴らしいものやことが謳われています。

「すべての美しいものに出あうこと」「かくされた悪を注意深くこばむこと」との言葉は、この詩の要旨です。我が人生を「生きる」中で敏感にならなければならぬ、「美しさと醜くさ」(美醜感覚)、「正しいことと間違ったこと」(正誤感覚)を常に磨きたいものだ!ということが伝わってきます。



『雨にも負けず』(宮沢賢治)。体調を何度も崩してしまった賢治。「死と背中合わせ」を意識しながら生きた賢治。その詩には賢治の理想とする生き方が書き綴られています。

一つ一つの言葉を何度も何度も音読し、暗唱してきた6年生。自信をもってその素敵な声を響かせてくれました。

この3月に、1・2・3年生の人たちが校長室に来てくれました。その中でも感動したことがあります。ある3年生児童が、「校長先生、九九をやりにきました。」と。

その児童は、2年生のときに合格しそこなっていたのです。それが本人の中で課題として残っていたのでしょう。3年生になって何度も練習してきました。でもなかなか合格できずにいました。それでも諦めないで、練習してきたのでした。

「よく来てくれました。では、自信をもってやってみてね。」

と励まして、じっと耳を傾けました。2の段から9の段まで、一気にやり抜きました。ほとんどつかえずにでき、見事に目標タイムをクリアして、合格したのでした。

ふだんおとなしいその児童は、ニコリと笑顔になって、「合格証」をゲットしました。素直な心でチャレンジし、粘り強くやり抜いた結果に、また一つ「自信」をつけました。

また、ある3名の児童が、「3年生のうちに、すごいね、と言ってもらえる俳句を作りたい!」と気合いの笑顔でやってきました。その場で何度も書き直し、さらに持ち帰って、また次の日に言葉を選び吟味して修正してきました。そこにも粘り強さが光っていました。その俳句を修了式で紹介しました。ここでは2つだけ紹介します。

「うぐいすの 鳴き声ひびき 花見ごろ」

「真っ赤な陽(ひ) すずめの元気 とんでいく」

修了式では、そのようながんばった姿を紹介しつつ、「春休みに2つがんばろう」と呼びかけました。

一つは、「『ドリルパーク』にチャレンジしよう。」

二つには、「目と目でパチッとあいさつに、チャレンジしよう。」

ドリルパークの内容はとても充実しているので、自学自習に最適です。チャレンジした結果、ポイントもたまっていきます。(ポイントほしさに同じ問題を何度もやることは、時間の無駄になります。そういう人はないとは思いますか...) とにかく、「学び直し」が大切です。**自分がわからなところまで戻って、チャレンジさせてください。**

「目と目であいさつ」は、全校的にその姿がたくさん見られるようになりました。その姿をカウントしてみると、西階段下では86人。事務室前では89人。それぞれ新記録でした。担任以外の先生(図工・音楽・事務員・用務員等)が、「あいさつポイント」に立ってくれて、そこを通過するたびに、「目と目」を合わせてあいさつしています。

「おはようございます」「こんにちは」「さようなら」は、相手の存在を大切にする行為となり、コミュニケーションの土台となります。この姿も大切にし、進級・進学に向けて「希望の春」を楽しんでくれたらと願っています。

# 令和6年度卒業式

## ～写真で見る卒業式特集～



## 卒業式 校長式辞（一部省略）

さて、卒業生の皆さん、本日は、晴れの門出に際して、「くちびるに歌をもて」というイギリスの話を通して、皆さんと対話するような気持ちで、一緒に想像しながら考えながら進めたいと思います。そしてその中から、はなむけの言葉を贈りたいと思います。

日本から遠く離れている国、イギリス。そのイギリスの近くの海で大事故が起こりました。深い霧が立ち込めていたその海を、一艘の船が運航中でした。突然、ドドーンと大型船と衝突してしまいました。その船は沈没してしまったのです。

皆さん、想像してみてください。真っ暗な夜で、さらに霧がかかっているのです。その中に突然、放り出されてしまったのです。もしも皆さんがそんな目にあったらどうしますか。

そのとき、暗い波の間に浮かんでいる一人の男がいました。男は、溺れないように、足と腕を動かし続けました。時々流れてくる木にもつかまきました。しかし疲れはたまる一方でした。もう長くは泳いでいられない気がしてきました。いつになつたら助けがきてくれるのだろう…と、不安は募り、気持ちは落ち込んでいきます。「もうだめだ…」とあきらめの心は「絶望」で一杯になりました。

とその時、遠くの方からかすかに歌声が聞こえてきました。

じっと耳を澄ますときれいな歌声です。

その天使のような歌声に元気をもらい、男はその歌の方へと泳いでいきました。

何人かの婦人が大きな材木につかまっているのが見えました。

歌を歌っていたのは、その中の一人のお嬢さんだったのです。

男は、なんとかそこに近づくことができました。そしてここまで泳げたことにお礼を言いました。

しかし、もともとそこにいたご婦人方は、口々に「いつになつたら助けがくるのかしら！」と不満をもらしていました。

そのような中にあっても、そのお嬢さんは、不平不満を言わずに、また歌を歌い続けるのでした。

男は冷静になって考え、ご婦人方に提案しました。「みんなで歌える歌を一緒に歌いませんか」と。

すると、ご婦人たちとは顔を見合わせ、声を合わせ、心を合わせて合唱に参加していったのでした。

何曲か歌っているうちに、歌うのを止めてしまう人が出てきました。

しかし、お嬢さんは合唱の中心になって、その美しい歌声を震わせながら続けました。

しばらくすると、遠くの方で何か音がしました。

「ボートだ。救助のボートが来てくれた。」

やがてそこにいた全員が引き上げられました。

男は、ほっと安堵の息をしました。そしてお嬢さんに向かって、

「お嬢さん、あなたの歌が、私たちを救ってくれたのです。」

「ありがとうございました。本当にありがとうございました。」

と心からのお礼を言いました。

さて、今の話には三者三様の生き方がありました。男の人、ご婦人方、お嬢さん。みなさんはどの生き方に心を動かされましたか。

まずは「男の人」。「感謝」と「知恵」の行動が見えました。次に、「ご婦人方」。だんだんとみんなと一緒に歌おうという「素直な心」が見えました。そして「お嬢さん」。このお嬢さんは、きっと皆さんと同じくらいの歳かもしれません。その「生き方」をもう少し想像しながら掘り下げたいと思います。

そのお嬢さんは、今まさに、油断すると海におぼれてしまう絶対絶命のピンチにありました。そのお嬢さんにとっては、「歌を歌うこと」は、きっと「自分の中で一番」だったに違いありません。それをいざというときに「勇気」を出して発揮しました。その歌声はみんなを元気づけ、それが「励まし」となりました。みんなは、一人の少女の勇気の行動によって、元気をもらい、生きる希望を見出しました。その始まりはお嬢さんの「勇気の一歩」に違いないと思いました。

以上のように、私なりに少し想像をふくらませてみました。

みなさんは、どのように感じましたか。この6年間の小学校生活、特に最高学年でのこの1年間。さまざまなところで活躍する姿は、この「勇気」を出したからではないでしょうか。初めはちょっと重荷だったにこにこ班の班長の役割、その責任を果たしたのも「勇気」。運動会では先生の踊りの指導に必死にくらいついていったのも「勇気」、展覧会でアートナビゲーターをやるのも「勇気」でした。これから皆さんは、中学生になっても高校生になっても、自分らしく、自分の良さを発揮してほしいと願っています。そのためにも、「ちょっと大変だな」「自分には無理かな」「少し恥ずかしいな」という弱い心を吹き飛ばして、誰の心にもある、この「勇気」を発揮していくことを願っています。そしてあのお嬢さんのように「自分の中の一番」をつくってほしいと思います。

それでは、最後に私からのはなむけの言葉として、一首 短歌を贈って、式辞といたします。

「くじけずに またくじけずにわが道を 勇気の一歩で 新たな自分を」